



特集 **これからの働き方**

やまなし

自治の風

Yamanashi JICHI no KAZE
Vol.48 September.2020

contents

- 巻頭随想
- 市町村リレー まちづくり夢づくり
- 苦言提言
- 地域シンクタンク
- 市町村の元気印



machijim **an**

お問い合わせ先

〒409-2102 山梨県南巨摩郡南部町福士26842
 TEL 0556-66-3366
 HPアドレス: <http://www.okuyama-onsen.com>
 詳細についてはホームページをご覧ください。



シリーズ ま・ち・自・慢

Nanbu-Town
南部町

山梨県南部町の秘湯 奥山温泉

南部町は、山梨県の最南端に位置し、北は身延町、東・南・西側の三方は静岡県（富士宮市、静岡市）に接した県境の町です。国道52号、JR身延線など、静岡県から山梨県にアクセスする際の玄関として交通の要衝となっており、「水と緑が溢れるふれあい豊かな町」としてPRしています。

自然豊かな南部町の中にある秘湯「奥山温泉」は、篠井山から流れる福士川の上流にあり、四季折々の色とりも美しく、絶景を楽しめる露天風呂をはじめ、大浴場、サウナやジャグジーなどくつろげる施設が多くあります。特に、秋の季節には、周りのやまあい広がる紅葉がとても色鮮やかで、温泉にゆったりと浸かりながら眺めることができます。

すぐそばにはオートキャンプ場もあり、また、篠井山への登山口も近く、登山者も多く訪れます。登山で疲れた体を癒すこともできますので、ぜひお越しください。

やまなし

自治の風

Yamanashi JICHI no KAZE
Vol.48 September.2020

Contents

Yamanashi JICHI no KAZE Vol.48 September.2020

- まち自慢 南部町
- 02 巻頭随想 「ハートフルタウン笛吹～優しさあふれるまち～」の実現を目指して
笛吹市長 山下 政樹
- 04 市町村リレー 甲府市
- 08 苦言提言 甲府市中心市街地、空きビル再生で重要だったこと
Atago HOUSE
代表 青木 はるひ
- 09 特集「これからの働き方」
- 10 特集1 テレワークの取組みについて
- 14 特集2 テレビ会議システムの取組みについて
- 17 特集3 国による地方公共団体におけるテレワークの導入に向けた支援について
- 18 講演録
- 24 地域シンクタンク
- 26 市町村の元気印
- 28 自治 Q & A
- 31 市町村調査研究事業
- 34 がんばっていま～す。
- 36 はつらつ!!市町村職員
- 38 市町村振興協会たより
時の人
編集後記



表紙写真 丹波渓谷

豊かな自然に恵まれた丹波山村。その中でも自然の美しさを醸し出しているのが、国道411号に沿って多摩川の本流である丹波川を囲む「丹波渓谷」。上流部ならではの清流の美しさ、秋の紅葉、春の新緑など四季折々の景色が訪れる人を喜ばせています。

【丹波山村提供】

「ハートフルタウン笛吹 優しさあふれるまち」 の実現を目指して

山下 政樹 笛吹市長



山下 政樹 (笛吹市長)

PROFILE
昭和41年5月11日生(54歳)
平成 元年 3月 拓殖大学政経学部卒
平成 5年 7月 国会議員公設秘書を9年間務める
平成 15年 4月 山梨県議会議員初当選(4期連続当選)
平成 28年 11月 笛吹市長初当選

私が生まれ育ち、愛してやまない笛吹市、私が市長に就任してから、間もなく4年が過ぎようとしています。

私は、市政は市民の幸せのためにあるべきという基本理念のもと、笛吹市に暮らす誰もが幸せを実感し、心にゆとりを持ち、優しさあふれるまちにしたいという想いから、就任後直ちに策定した第2次笛吹市総合計画で、市の将来像を「ハートフルタウン笛吹く優しさあふれるまち」とし、その実現に向け、三つの基本目標のもと、施策や事業を展開しています。

基本目標1「幸せ実感 心豊かに暮らせるまち」では、市内への子育て世代の移住及び定住を促進するための補助、英語に堪能なボランティアによる外国語授業の支援、私立保育園等に看護師等を配置する経費の補助、フレイル予防のための地域ボランティア等による通いの場づくりなどに取り組んでいます。

基本目標2「幸せ実感 にぎわいあふれるまち」では、富士北麓に來られた観光客に、笛吹市まで訪れていただけるよう整備する「新道峠展望台」、年間を通してストーリー性のあるイベントを行い、目的地となる観光地を目指す「笛吹物語プロジェクト」、新たに農業を始めようとする方や農業者・後継者の支援を行う「笛吹市農業塾」、優良企業の積極的な誘致などに取り組んでいます。

基本目標3「幸せ実感 100年続くまち」では、さまざまなイベントが開催できる緑豊かな公園である「笛吹みんなの広場」の整備、市が保有する地図データを庁内横断的に利用し、業務の効率化を図る「統合型GISの構築」、新たな行政ニーズに的確に 대응するとともに、引き続き質の高い行政サービスを提供していくために、第4次笛吹市行政改革大綱を策定し、予算編成に直結した事務事業の見直しなどに取り組んでいます。

総合計画を着実に推進していくためには、市役



大蔵経寺山からの富士山



釈迦堂からの桃源郷

所職員にその能力を最大限に發揮してもらおう必要があり、私の想いを職員と共有し、共に市政を推進するという意識を持ってもらいたいと考え、私が職員に期待することを毎年の行動テーマとして掲げています。

令和2年の行動テーマは「役割と責任」です。日頃から、管理職にはマネジメント能力の向上、若手職員には柔軟な発想による事業の提案を求めており、全ての職員が自らの役割をはつきりと自

覚し、責任をもってその役割を担ってもらいたいと考えています。

現在、本市では、発足以来の難局に直面しています。

昨年から、峡東地域を中心に猛威を振るったモモせん孔細菌病は、難防除病害として知られており、本病の発生の激しさと防除の難しさから作柄に大きく影響するため、地域全体での計画的な一斉防除が不可欠とされています。

本市では、「桃・ぶどう日本一の郷」を守り抜くために、桃生産農家に対し、防除薬剤費を補助するとともに県、市、JA、農業者代表などによる「笛吹市モモせん孔細菌病防除対策本部」を設置し、オール笛吹の体制で地域ぐるみの防除対策を講じ、せん孔細菌病の早期の撲滅を目指しています。

さらに、新型コロナウイルス感染症対策については、部長以上で構成する新型コロナウイルス感染症対策本部において、感染症に関する情報共有と感染症の拡大防止策の協議を行い、市役所を挙げて対策に取り組んでいます。

また、国や県が打ち出した支援策を整理した上で、国や県の支援に単なる上乘せはせず、国や県の支援が届かない方々、支援を手厚くする必要があり、市独自の手当として、市独自の支援を行っています。

新型コロナウイルス感染症の終息が見通せない中、今後も様々な課題が生じるとは思いますが、市民の不安を解消するために、適時適切に対処していきます。

現在の難局を乗り切ったとしても、少子高齢社会の進展に伴う課題など多くの課題が依然として存在し、今後も生じてくると思えます。

一方で、本市発展の可能性を飛躍的に高めることが期待される中部横断自動車道の全線開通やリニア中央新幹線の開業などを控えており、この好機を逸することなく最大限に生かす施策が求められています。

スピード感とチャレンジ精神をもってこれらの課題に対処していくためには、市役所を人口7万人の市にふさわしいものにステップアップさせる必要があります。

今後、限られた財源、限られた職員数で、行政サービスの質を向上させていくには、職員一人一人の業務内容の見える化を図り、無駄の排除、ICT技術の導入などを進め、業務の効率化を突き詰めて、市民の期待に応えていきたいと思えます。

今後、市の将来像「ハートフルタウン笛吹」を実現し、市民の皆様が心にゆとりを持ち優しい気持ちで安心して暮らすことができるように、そして幸せを実感できるように、全力で取り組んでいきます。



川中島合戦戦国絵巻

市町村リレー

まちづくり 夢づくり

甲府市 45

MACHIZUKURI
YUMEZUKURI

市民の笑顔と

まちの元気があふれるまち・甲府

こうふ開府500年の歩み

甲斐の名将「武田信玄公」の父である信虎公が、1519（永正16）年に躰躰ヶ崎（現在の武田神社）に館を移し、「甲斐の府中」として、甲斐の国・山梨県の中心地・甲府のまちが始まりました。徳川家の統治下になってから約100

年後、5代将軍徳川綱吉の側近であった柳沢吉保と、その子吉里父子が甲府城主のときには、江戸時代を通じて甲府城下が、最も繁栄した時代でした。

柳沢父子は、甲府城の修繕や、城下町の拡充などを積極的に進め、この時代は、『是れぞ甲府の花盛り』との評判が出るほど、町は大いに賑わっていた

とされています。

甲府に市制が施行されたのは、明治22年で、全国で34番目、関東では横浜・水戸・東京に次ぐものです。

このように長い歴史を有する、ふるさと甲府のまちは、令和時代の幕が開けた昨年、開府500年という大きな節目を迎え、「過去に学ぶ（歴史・文化等



こうふ開府500年記念事業「私のいちおし甲府フォトコンテスト」
小中学生部門最優秀賞作品「甲府の夜景・富士山・オリオン座の共演」

の継承)」「現在を見つめる(賑わいと魅力の創出)」「未来につなぐ(新たな甲府の創造)」の基本理念のもと、市民と共に「こうふ開府500年記念事業」を推進し、新たな飛躍となる、次なる100年に向けてスタートしました。



こうふ開府500年記念事業「NEXT KOFU セレモニー」

中核市・甲府

先人たちが、たゆまぬ努力によって築き上げてきた甲府市が、未来に向けて、更に発展することを願い、分権時代をリードする自治体として、相応しい権限と責任を持ち、市民生活を、より一層充実させていくため、本市は、昨年4月1日に中核市へ移行しました。中核市に移行すると、山梨県から移譲を受けた約2,500に及ぶ事務権限

を最大限活用して、独自性を持った特色あるまちづくりを進めることができ、その大きなメリットのひとつに、保健所の設置があり、本市では、健康づくりを支援する拠点施設とするため、保健センターと保健所が一体となった、「甲府市健康支援センター」を開設しました。

保健所は、健康危機管理の拠点としての機能を備えており、今般の、「新型コロナウイルス感染症」の拡大に対応した、「帰国者・接触者相談センター」を設置する中で、保健師や看護師の専門スタッフによる相談体制を強化し、市民の皆様方の不安感の軽減や疑問の解消等を図るなど、保健所としての機能を最大限発揮しています。

また、地方自治体を取り巻く最近の状況は、人口減少や高齢化の加速的な進行に加えて、新型コロナウイルスの感染拡大という、これまでに経験したことのない、非常に厳しい局面を迎えております。

このような社会情勢の中、地域の産業経済の維持・発展を支え、住民の豊かな暮らしを後押ししていくことが中核市となった本市に求められていることから、周辺自治体のご理解のもと、持続可能な地域社会の形成に向けた協議の場として「県央自治体実務者会議」を立ち上げました。

この会議は、生活行動や経済活動の結びつきが強い自治体相互が、その区域を越えて、共に手を携えながら持てる英知を総動員し、地域全体に新たな価値を生み出し、地域に活力を呼び戻



中核市移行式

すような、広域連携を軸にした政策の導入について共に考える機会としております。

「こうふ未来創り重点戦略プロジェクト NEXT」

開府500年の節目を迎え、中核市として新たな一步を踏み出した甲府市が、多岐に亘る時代のニーズに柔軟かつスピード感をもって応えながら、山積する課題に果敢に挑戦し、「市民の笑顔とまちの元気」があふれるまちづくりを進めるため、「こうふ未来創り重点戦略プロジェクト NEXT」を、昨年6月に策定しました。

このNEXTには、開府から500年という長い歴史を経て今日に引き継がれてきた「故郷こうふ」の更なる発展に向け、市民の皆様と力をあわせ、また、国や県、民間企業等とのネット

ワークを活かす中で、今、本市が抱える様々な課題に果敢にチャレンジし、「笑顔あふれるまちづくり」に「元気をプラス！」として、甲府の輝かしい未来に向け、令和元年度から令和4年度までの4年間、位置付けた取組を重点的かつ着実に展開していくこととしています。

NEXTは、7つの重点施策、「元気スタイル」で構成し、この7つの元気スタイルに関連付けた「14の方向性」を示すとともに、51の取組を位置付けて推進していきます。

元気スタイル

- 1は、子ども輝くまちを創る
- 2は、健康といきがいのあるまちを創る
- 3は、女性活きいきのまちを創る
- 4は、潤いと活力あるまちを創る
- 5は、故郷が好きなきを創る
- 6は、世界が繋がるまちを創る
- 7は、タフで優しい市役所を創るです。

令和2年度は、『With・Afterコロナ』を見据える中で、次のステージへと歩みを進め、「こうふ未来づくり重点戦略プロジェクトNEXT」に掲げた、「7つの元気スタイル」の各取組を力強く推し進めていけるよう、一つひとつの取組に意を配る中で、これまで以上に事務事業の選択と集中に重点を置いた、事業展開を図っていくこととしました。

「子ども輝くまち」を創る

子どもの権利を尊重し、成長を応援

することで、子どもが輝くまちの実現を目指すこととした「甲府市子ども未来応援条例」を本年3月に制定し、「子ども応援センター」を核とした、民間、大学等の各種団体とのネットワーク構築に取り組みとともに、豊かな心と健康やかな身体の育成を図る中で、安全・安心して運動遊びが楽しめる「子ども屋内運動遊び場」を設置することとしました。

「子ども屋内運動遊び場」は、多様な遊具を配置するだけでなく、子どもが夢中で遊べるように、子ども遊びを誘引するプレイヤーを配置して、子どもも運動遊びをサポートするほか、年齢別・機能別のゾーンニングにより、「楽しさ」と「安全性」を確保しながら、子どもたちが思いきり、運動遊びを楽しめる遊びの環境を創出します。



子ども屋内運動遊び場イメージ図

オープンは令和3年4月を予定しており、設置場所は、甲府城南側エリアに位置する民間ビルの空きスペースを活用して、中心街の活性化や魅力づくりにも繋げていきます。

甲府市内のみならず、山梨県内の子どもたちや子育て家庭の皆様に愛され、笑顔があふれる安全・安心な施設となるよう、取り組んでいきたいと考えています。

「女性活きいきのまち」を創る

女性の起業や就職を応援していくこれまでの取組に加え、起業・創業を後押しするための「女性おうえん資金制度」の創設や、様々な分野で活躍する女性たちの意見交換の場となる「こうふまちづくりラウンジ」を実施し、女性の視点を活かしたまちづくりに取り組んでいきます。

また、来年度、本市では「日本女性会議2021 in 甲府」の開催を控えており、今年度は、各種関係団体の皆様方と、連携・協力しながら大会開催の準備を進めるなど、女性が活きいきと活躍できる場の創出に取り組んでいます。



こうふまちづくりラウンジ

「潤いと活力のあるまち」を創る

本年6月に、本市が甲斐市とともに申請しておりました「甲州の匠の源流・御嶽昇仙峡」水晶の鼓動が導いた信仰と技、そして先進技術へ」が『日本遺産』に認定されました。昨年度、昇仙峡地域の活性化を図るために設置した昇仙峡リバイバル会議において、観光資源の更なる魅力発掘や誘客への取組等をまとめた「昇仙峡リバイバルプラン」を活用する中で、新たな観光資源の掘り起こしを行うとともに、古くから続く伝統と高い技術によって支えられた地場産業を有効に活用し、賑わいの創出につなげる観光施策を推進してまいります。

また、こうした歴史ある資源を保有する甲府らしさを活かしつつ、リニア中央新幹線の開業を見据え、東西を結ぶ中央



御嶽昇仙峡を代表する見どころの1つ「仙娥滝」



本線、中央自動車道、南北をつなぐ中部横断自動車道などの交通結節点である優位性を活かして、暮らしの質の向上や経済の飛躍的な発展など、その効果を最大限享受できるよう、福祉施策、産業振興など様々な分野において、活力と魅力あふれる未来のまちづくりにつなげていきたいと考えています。

「故郷が好きなまち」を創る



甲府城周辺整備イメージ図
(甲府市・山梨県「甲府城周辺地域活性化実施計画」より引用)

甲府の歴史や文化を今に伝え、新たな文化を創造するとともに、中心市街地の活性化に繋げていくため、『甲府城』を活かして、その周辺が一体となった開放的な空間の創出、様々な人が集まり交流する、賑わいのある空間を創出するなど、甲府城の歴史・文化と自然が感じられ、エリアの価値・魅力を高めていくような、甲府城周辺の整備に取り組んでいます。

また、歴史ボランティアガイドが「語り部」となり、信玄ミュージアム等を拠点として、本市の歴史や魅力を市民や県外からの来訪者に伝えるなどの取組を進めています。

終わりに

平成から令和へと新たな時代が始まった令和元年は、本市にとりましても、中核市・甲府として、多岐にわたる事務権限を最大限に活かす中で、市民に寄り添ったきめ細かな施策を展開するとともに、開府500年や市制施行130周年など、新たな歴史の1ページを刻む一年でありました。

令和2年度は、コロナ禍からの克服を目指して、まずは市民の安全・安心な暮らしを守ることを最優先に、『Withコロナ』また『Afterコロナ』の考えのもと、「新しい暮らし方」「新しい働き方」「新しい学び方」に対する取組を推進しているところです。

更に、こうふ開府500年の記念事業などにより、市民の皆様により培われた「こうふ愛」を大きな力とし、来るべくリニア新時代を見据えて、様々な事業を着実に展開するとともに、自治体間連携の更なる深化や、多様な主体との協働を推進するなど、市民福祉の増進と地域の活力向上に努め、「市民の笑顔とまちの元気があふれるまち」の実現に向けて、市政を推進し、未来へと甲府市を発展させてまいります。

甲府市中心市街地、空きビル再生で重要だったこと

2014年4月9日。私が甲府に初めて降り立った日。私は、1棟のビルと出会いました。

それが、「甲府ぐるめ横丁」の舞台となる「芳野ビル」でした。昭和41年に甲府の中心街、かすがモール商店街に建設され、かつてはスナック・飲食店が42店舗も軒をならね中心街一の夜の賑わいを誇っていたビル。しかし、時代の変化とともに店の数は減少し、この時はわずか4店舗のスナックが残るほぼ廃墟と化したビルでした。そこで私を待ち受けていたのは、会社の社長からの一言。「ここに屋台村を作ろう。おまえが担当だ。」

そこから、甲府ぐるめ横丁の立ち上げが始まりました。私が勤めていた株式会社アスラボという会社は、東京青山にオフィスを構える当時創業4年社員も10名足らずの不動産開発を事業とするベンチャー企業で、そこから2ヶ月で芳野ビルを購入、2014年8月から出店者の募集を開始しました。そこから4ヶ月で11店舗の出店者を決定し、その後約3ヶ月かけて、出店者全員で屋台村のソフト・ハード面に渡るコンセプトを考え、2015年4月に工事を開始、翌5月に芳野ビルは15店舗集まる甲府ぐるめ横丁として、生ま

苦言 提言

Kugen Teigen

青木 はるひ

Haruhi Aoki

Atago HOUSE 代表



れ変わりました。現在オープンして5年が経過、年間総売上約1.5億、年間推定来街者数は約5万人、夜遅くまでサラリーマンや若い男女で賑わう中心街の新たなスポットとして定着してきました。

しかし、出店者募集を開始した当初は、WEB・チラシ等で告知をするものの問い合わせは一切なし、1日100件の電話営業をするものの門前払い、地方特有の内輪文化、東京の会社から突然やってきた若者への不信感も重なり、興味を持ってくれる方はほとんどいませんでした。

そんな逆境の中、どのようにして15店舗も集まる横丁として再生ができたのか、重要だったことは3点あると考えています。何かつでも今後の山梨県のまちづくりの参考になれば幸いです。

1点は私自身が甲府に住居を構え、人脈を拡大してきたことです。中途半端な気持ちでは、地元の方に信用してもらえないと思い、甲府に住居を構え、あらゆるイベントやコミュニティの集まりに顔を出し、プロジェクトの説明をし、人に人を紹介してもらい、1045枚の名刺を集めました。そして出会った人々からの紹介で、11店舗の出店者を集めることができました。

2点は、出店者へ初期コスト0で開業支援を行ったことです。出店者募集をする中で、独立して飲食店を開業したいと考えている20代〜30代の若者がたくさんいる印象を受けましたが、その多くは実績がないことや借金することに不安を抱えていました。そこで、最初にかかる店舗の内装・設備工事等を株式会社アスラボで負担し、日々の運営で返済していく仕組みを整えました。解約も1ヶ月前、原状回復も免除とし、リスクを限りなく減らし、誰でもチャレンジできる環境を作り出したことが若い店主を集めることに繋がったと思います。

3点は出店者全員で施設のコンセプトを考えたプロセスです。通常の不動産開発では、ハードを作ってから出店者を募集しますが、横丁の立ち上げでは、出店者を先に決め、皆でハードを作るソフト専攻型のプロセスを踏みました。各出店者、飲食店経営の仕方、料理や空間へのこだわり等考え方は様々で、施設の名称を一つ決めるにも大変でしたが、横丁の舞台で主役となる出店者さんが想い通りの空間を作れるよう調整に奔走しました。そしてこのプロセスこそが、个性的なお店と店主が集まる横丁の実現と老若男女、様々な客層の集客の成功に繋がったと思います。